

## メッセージアウトライン コリント人への手紙 第一12:12~20「からだは一つ」

[12]「ですから、ちょうど、からだ一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です」

パウロは今まで教会を畑や建物にたとえて、その特長を教えてきた。ここでは、人体を例にとって教会の統一性と有機的関連性を教えていく。人間の体は多くの部分に分かれているが、それらはみな有機的につながっており、バラバラではなく一体性を保っている。パウロは「教会もそれと同様です」というところ、「キリストも…」と言い換え、教会とキリストの一致をはっきりと示している。

[13]「なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです」

これは単に形式的な水のバプテスマのことではなく、御霊の働きの支配下に生きる者となったことを示している。「……一つの御霊を飲む者とされた」とはイエス・キリストを信じたすべての者に御霊の賜物が与えられたことを言う。その目的は「一つのからだとなるように」である。皆がバラバラで勝手なことをするためではない。

[14]「確かに、からだはただ一つの器官ではなく、多くの器官から成っています」

ここでは12節の表現の再確認がなされている。

[15-16]「たとい、足が、『私は手ではないから、からだに属さない』と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。たとい、耳が、『私は目ではないから、からだに属さない』と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません」

手と足を比べれば、手の方が色々なことができ、よく目立つ。しかし、足がなければからだを支えることはできず、移動することもできない。目は何でも見ることができても耳はできない。だからからだではないと言うことはできない。

信仰者は自分の賜物を人と比べて、卑屈になって自分は教会に必要な存在だと思っはならない。また賜物を誇って高慢になってもいけない。

[17]「もし、からだ全体が目であったら、どこで聞くのでしょうか。もし、からだ全体が聞くところであったら、どこでかぐのでしょうか」

ねたみや嫉妬から他の人と全く同じようになりたいと思うのは愚かなことである。

[18]「しかしこのとおり、神はみこころに従って、からだの中にそれぞれの器官を備えてくださったのです」ここは11節を別のことばで表現しているところである。

[19]「もし、全部がただ一つの器官であったら、からだはいったいどこにあるのでしょうか」どれだけ重要と思われる器官も、それだけではからだを構成することはできない。人間のからだも教会もこの点で同じである。

[20]「しかしこういうわけで、器官は多くありますが、からだは一つなのです」

教会は手、足のような人も、目、耳のような人もみな必要であり、それぞれが与えられ

ている御霊の賜物をもって奉仕することが大切である。そのような一人一人によってキリストのからだなる教会が構成されていくのである。